

東京都周辺における外来種ワカケホンセイインコ (*Psittacula krameri manillensis*)の個体数変化

○1松永聡美・1藤井幹・2日野圭一・3池田威秀・4阿部仁美

1日本鳥類保護連盟・2帰化鳥類研究会・3京都大学野生動物研究センター・4千葉科学大学

1.はじめに

外来種のワカケホンセイインコ *Psittacula krameri manillensis* は1960年代後半のペットブームに乗じて日本に相当数が持ち込まれた（写真1）。一時は全国各地で記録されたが現在では神奈川県、埼玉県を含む東京都周辺・千葉県・群馬県の3つの個体群のみが確認されている。野生化した移入種の個体数変動をモニタリングしていくことは、分布の拡大や農業被害、生態系への影響を推測する上で重要な情報となるが、日本におけるワカケホンセイインコの個体数調査に関しては一時的に実施されたものが多く、変動を定量的に示すためのとりまとめは今まで行われてこなかった。そこでこれらの個体群の中でも東京都周辺に分布している最も大きい個体群について、1980年代から2021年に至るまで、筆者らが別々に実施した個体数調査のデータを取りまとめて個体数変動について把握を試みた。



写真1. ワカケホンセイインコのオス

2.方法

使用するデータは、1983年から1989年は帰化鳥類研究会、2001年から2014年は東京工業大学、2017年から2021年7月は日本鳥類保護連盟、2021年8月は阿部仁美、帰化鳥類研究会らが主体となって個体数調査を実施し得られたものである。各調査者らは別々に調査を実施しているが、いずれもワカケホンセイインコがねぐらに集まる習性を利用し、集団ねぐらでのカウントを行ったものである。集団ねぐら周辺に定点を配置し、各定点から目視によりカウントを実施した。2001年から2006年及び2017年以降の調査ではワカケホンセイインコが入ってくる主要なルートにビデオを設置して撮影することで、正確な個体数の把握に努めた。ワカケホンセイインコは集団ねぐら間を移動している可能性があるため、複数の集団ねぐらが確認された2017、2019、2020年の調査では、全ての集団ねぐらにおいて同日に調査を実施し、総個体数の把握を試みた。これらの調査結果を整理し、比較できるようとりまとめを行った。集団ねぐらの場所については攪乱によるねぐらの分散、生息域の拡大を防ぐためここでは明記しないこととする。

3.結果

それぞれのデータを図1、表1にとりまとめた。

図1は表1の中から個体数の変動を比較する上で有効なデータを引用した。

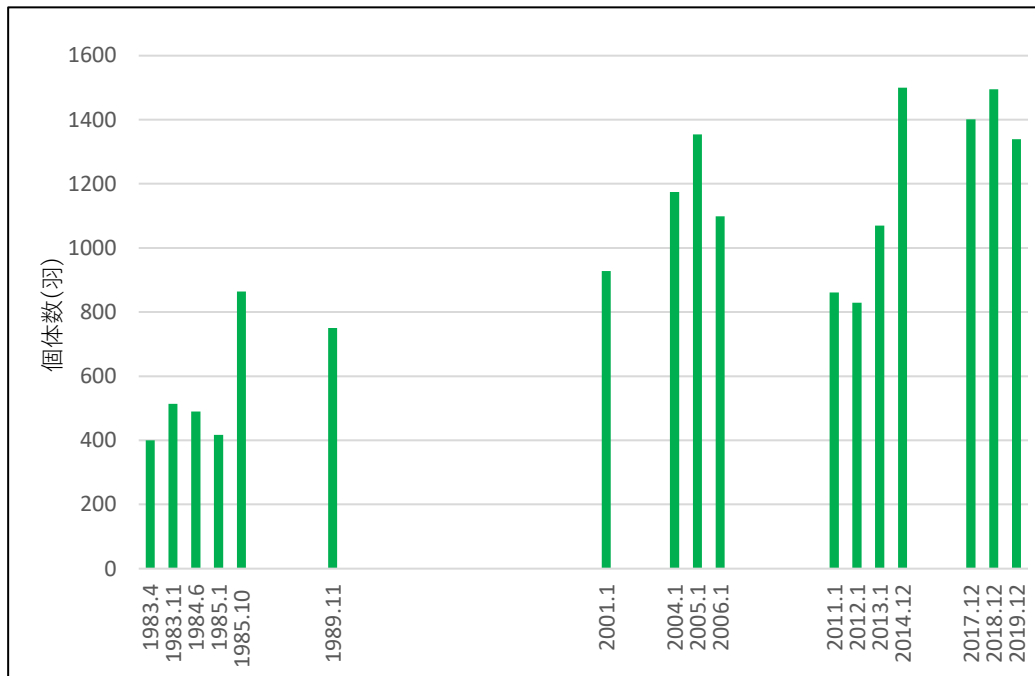


図1. ワカケホンセイインコの個体数変動

No※	日付	羽数	情報源(五十音順)
1	1978.12.03	400	読売新聞社(帰化鳥類研究会調べ)
2	1983.4.24	400	帰化鳥類研究会
3	1983.11.1	514	帰化鳥類研究会
4	1984.6.01	490	帰化鳥類研究会
5	1985.1.05	417	帰化鳥類研究会
6	1985.10.19	864	帰化鳥類研究会
7	1989.11	750	帰化鳥類研究会
8	2001.1	928	東京工業大学
9	2004.1	1174	東京工業大学
10	2005.1	1354	東京工業大学
11	2006.1	1099	東京工業大学
12	2011.1.28	861	東京工業大学
13	2012.1	829	東京工業大学
14	2013.1.30	1070	東京工業大学
15	2014.12.5	1500	東京工業大学
16	2017.12.27	1401	日本鳥類保護連盟
17	2018.1.10	381	日本鳥類保護連盟
18	2018.12.26	1495	日本鳥類保護連盟
19	2019.12.30	1339	日本鳥類保護連盟
20	2020.1.21	257	帰化鳥類研究会、日本鳥類保護連盟
21	2020.9.18	1585	日本鳥類保護連盟
22	2020.12.23	439	日本鳥類保護連盟
23	2021.7.22	1164	日本鳥類保護連盟
24	2021.7.22	763	日本鳥類保護連盟
25	2021.8.8	2500	阿部、帰化鳥類研究会
26	2021.8.22	2120	阿部、帰化鳥類研究会

表1. 各個体数調査の結果 1983年-1989年は帰化鳥類研究会、2001年-2014年は東京工業大学、2017年-2021年7月は日本鳥類保護連盟、2021年8月は阿部、帰化鳥類研究会らが主体となって実施

- ※1：調査方法については不明であるため、図には加えなかったが、参考値として表に示した。
- ※2～5：集団ねぐらの木が窪地にあった為、視野が確保できずカウント漏れがあったことが予想される。
- ※16、17：16のカウント調査を実施した数日後に新たな集団ねぐらがあることが発覚した。聞き取り調査によると16の調査以前から存在していることが予想された。そのため追加調査として17を実施した。同日の調査ではないため、正確な数値ではないが16と17のカウント数を合計すると1782羽となり、それに近い個体数が実際にはいたことが予想される。
- ※19、20：16、17と同様の事例が起こったため、追加調査として20を実施した。やはり同日調査ではないため正確なデータではないが19、20のカウント数の合計1596羽に近い個体があったことが予想される。
- ※21：複数の集団ねぐらがあることが予想される中で一つの集団ねぐらのみをカウントした為、総個体数ではない可能性が高いが、参考値として表に示した。
- ※22：集団ねぐらが複数に分かれたことで全ての集団ねぐらを把握できなかった可能性が高く、総個体数をカウントできなかったと考えられる。
- ※23、24：23は早朝、24は夕方それぞれ異なる集団ねぐらを実行した。同時カウントではない為正確ではないが1927羽近い個体がいることが予想される。
- ※25：2か所の集団ねぐらにおいてカウントを行いその羽数を合計した。他の集団ねぐらがある可能性もあり、総個体数とは言い切れないが参考値として表にしめた。
- ※26：事前に既知のねぐらを取り回り、集団ねぐらが1か所であることを確認しカウント調査を実施したためこのデータが8月の総個体数に近いと考えられる。しかし8月は個体数が最も多くなる時期なので図に記すと急増したように見えることからあえて図には記していない。

4. 考察

ワカケホンセイインコは5月から8月にかけてヒナが巣立つため、7月から8月にかけて最も個体数が多くなり、その後若鳥が外敵に襲われて死亡するなどの理由により徐々に減少する。さらに少数ではあるが11月頃からは巣穴で寝泊まりする個体が出てくるため、集団ねぐらで確認できる個体数はさらに減少し、2月から4月にかけては営巣を始める雌個体が巣穴に残り始めるので、最も少なくなる傾向がある(江口 2018)。このような季節変動があるため、同じ月において比較することが個体数変動を把握する上では最も有効であると考えられるが、長年の調査の中で主体となる調査者が異なったことにより同じ月での比較ができない年が生じた。しかし、個体数が比較的多いと考えられる10月にカウントした1985年とそれよりも個体数が少ないと考えられる12月にカウントした2014年以降を比較しても明らかに2014年以降の個体数が多いことから、ワカケホンセイインコは増加傾向を示していると推測される。

現時点では急激な増加は確認されていないが、ハワイ、イギリス、ドイツなどでは顕著な増加傾向を見せなかったホンセイインコが、ある年を境に急激に増加したことが報告されている(Butlur2013, Liviu2016, Klug 2019)。これは、一定の個体数を越えて繁殖が安定したためではないかと推測されているが、日本でも今後個体数が増えることで急激な増加へと繋がる可能性が考えられる。

また、近年では集団ねぐらが1ヵ所に落ち着かず、頻繁にねぐらを変える傾向にある。イギリスでは集団ねぐらの分散が始まったことで個体数の追跡ができなくなっているが(Liviu2016)、日本でも集団ねぐらは近年複数に分かれる傾向があり、今後集団ねぐらの数がさらに増えれば集団ねぐらでの個体数調査を実施することは困難になることが予想される。

謝辞

本調査を実施するにあたり、カウントにおいて以下に記載した方々にご協力いただいた。厚く感謝申し上げます。

調査ご協力者(五十音順)

磯部政人、市田淳子、稲村優一、江口水織、岡田その、岡安栄作、掛下尚一郎、金子一、岸昌孝、栗原直美、児玉芳郎、重岡昌子、諏方紅音、長濱陽介、成末雅恵、西澤彩香、奴賀俊光、葉山嘉一、久島瑠悠那、松丸一郎、Manuel Jr. YULO、三谷遥海、室伏龍、山崎法子、横山恵、横山隆一、吉澤康作、吉田裕樹

引用文献

江口水織 (2018) ワカケホンセイインコ (*Psittacula kramera manillensis*)における集団増の季節変動.東京農業大学卒業論文

Chris Butler (2013)The breeding biology of Rose-ringed Parakeets *Psittacula krameri* in England during a period of rapid population expansion. British Trust for Ornithology, Bird Study, 60, 527–532

Liviu G. Pârâu, Diederik Strubbe, Emiliano Mori, Mattia Menchetti, Leonardo Ancillotto, André van Kleunen, Rachel L. White, Álvaro Luna, Dailos Hernández-Brito, Marine LeLouarn, Philippe Clergeau, Tamer Albayrak, Detlev Franz, Michael P. Braun, Julia Schroeder, Michael Wink (2016) Rose-ringed Parakeet Populations and Numbers in Europe: A Complete Overview. The Open Ornithology Journal, 2016, 9, 1-13

Page E. Klug, William P. Bukoski, Aaron B. Shiels, Bryan M. Kluever, and Shane R. Siers (2019) Critical Review of Potential Control Tools for Reducing Damage by the Invasive Rose-ringed Parakeet (*Psittacula krameri*) on the Hawaiian Islands. USDA APHIS Wildlife Services National Wildlife Research Center